

■ 編集だより

編集後記

歳のせいかこれからの過ごし方を考えるようになった。加齢に伴うさまざまな課題について医学ではエイジングという用語を中心に語られることが多いと思うが、最近、同じ英語で歳をとることを「グロージング」ということを知った。事実、ゲートは『だれでも老人になることはできるが、だれもが豊かな老年を迎えられるわけではない。あなたの晩年は、きょうのあなたの生き方によって左右されるのだ』と述べており、老いに関する多くの書で「豊かな老いは今日から始めなければならない」ということが共通しているように思う。

また、積極的な意味だけではなく、齢を重ねて衰えていくことや忘れていくことをむしろ肯定的に捉えようとする考え方がある。例えば、西丸四方先生は「老人が痴呆になるのは死の接近を気づかないようにするために、新しい過去を忘れ、古い過去のみで生きるのは、死の不安から目をそむけるための合目的な態度である」（日本医事新報、1998年）と書かれている。自身の経験でも、ある日の診療で高齢の患者さんが初めて戦争の体験を語ったときに、古い戦場の記憶がセピア色のように柔らかい思い出に変わったことで話せるようになったと述べていた。

少し前の本であるが、「老人力」（赤瀬川原平）という本がある。著者は写真家であるが、この本の中にカメラに関する以下のような文章がある。『無人島に一台だけカメラを持って行くとしたら、という場合は（中略）、いずれにしろ昔の機械式カメラだ。』『中古カメラとして珍重されるのはもちろん機械式カメラのことである。（中略）いつまでも作動する。寿命が長い。だから中古カメラに必要なのは、つまり老人力に必要なのは、ストレッチだ。それも日常生活のストレッチがいい。（中略）趣味のストレッチである。』

ここでいう機械式カメラの特徴は電池がなくても動くことであり、絞り・シャッタースピード・ピントを勝手に変えて、ピントの合っていないボケた写真も撮れる、すなわちボケ味を出せることである。さらにはピンホールカメラには箱があり、全くピント合わせが要らず、光が小さな穴を通して反転して感光紙に被写体を映し出すという究極のアナログと言えるような代物である。ピンホールカメラの最大の売りはボケ味にあるが、その延長線で考えたのはわれわれの心にも適度なピントとボケ（物忘れ）が必要で、ある意味でそれが生きていく力にもなるのではないかと思った。

私見ではあるが、すべてを忘れることは健全ではないのと同様にすべてを覚えておくことも実は健康的とはいえない。機械式カメラを使って適度のピントとボケを出すことは熟練を要するが、ピンホールカメラのように心をアナログにしてじっと心に映ってくるもの、心に残ってくるものを味わうように歩めればそれが生きる力になっていくのではないかと、と最近考えている。

精神誌への投稿の中には長い臨床経験で得られた知見をまとめた先輩諸氏による原稿が少なからずある。知能には結晶性知能という概念があるが、年月を経て得られた着想にはそのような経験や知識が結晶化されたような視点を感じることもある。ただ、客観性や倫理性における課題が見い出される中で厳しめの査読意見をフィードバックせざるを得ないこともあるが、昨今はそのような投稿が減っているようにも思う。

本誌が次世代への古き良きものを含め知識の伝承の一翼を担うような役割を果たせたらと願う。そのためにさまざまなジャンルがあり、今後の選択肢の拡充を議論することもあるが、会員諸氏においては経験や知識を結晶した論文の積極的な投稿が期待されている。自身も編集委員会の一員としてお送りいただいた貴重な投稿論文にピントを合わせ、心の目を通して映るものを眺めながら、読者のこころの風景に残る論文になるようお手伝いができればと願っている。

谷井久志